

# 生活の経済学－ J. ラスキンと J.A. ホブソン

本 山 美 彦

## Economics of Life–John Ruskin and John Atkinson Hobson

MOTOYAMA Yoshihiko

### ABSTRACT

Although attempts to write Economics of Life by John Ruskin and John Atkinson Hobson were not totally successful, their theoretical writings are mirror reflections, albeit unwilling, of capitalist ideology transferred from the realm of economics to the realm of ordinary life. They protested against the abstract theories of classical political economy and pretended to substitute for its concept of economic value a new understanding of Life. They felt a certain necessity to continue defending what they believed to be the proper place of life in national economy.

キーワード [良い貯蓄] [良い労働] [抑制の美]

### はじめに

頓挫したが、前の安倍政権は、年収400万円以上のサラリーマンに「ホワイトカラー・エグゼンプション」(White Collar Exemption=WE)という、残業代ゼロ制度を導入しようとしたことがある。

まさに、労働界は孤立無援である。勝ち誇った支配者からの居丈高な怒鳴り声が、日本国中に響く。そして、労働組合という防波堤を失った働き手の労働そのものが壊死寸前にある。

精緻化されたがゆえに、経済学だけが文系学問の中で科学だと豪語されるようになって久しい。経済学が他の分野から科学として評価されているのか否かは、いまは問わない。少なくとも、経済学が血の通わない干からびた屁理屈を述べるだけの記号屋に墮落してしまったことだけは確かである。干からびた御用学問は、悲惨な労働破壊にはなんらの痛痒も感じてはいない。昔の経済学は、こうした悲惨な状況からの脱却方法を、懸命に模索し

てきたものであったのに……。労働の尊厳を高らかに唱えていた昔の経済学への想いを本稿では語りたい。

## 1 正統派から拒否された J.A. ホブソン

経済学は、金儲けではなく、人間生活における、生き甲斐を追求する「思想の一般体系」(general system of thought)の一部でなければならないと訴えていた人に、J.A. ホブソン (John Atkinson Hobson) がいる。経済学は、社会生活の量的側面のみでなく、質的側面をも扱うべきであり、倫理を中心とする社会一般の指導原理を打ち立てるべきであると強調したのがホブソンであった。彼の『異端の経済学の告白』という著書の序文には、次のような主張が展開されている (Hobson, J. A. [1976])。

「私は、現代の正統派経済学の『価値』、『費用』、『効用』といった用語を使いたくない。それゆえに、私は本書の題名に異端という言葉を使うことにした。異端という表題は、私には突飛なものとは思われない。異端という言葉が、私の思考にピッタリと当てはまるからである。私は経済学の用語に、人間論的解釈を与えておきたい。私は、産業技術、および、その成果を使う行為と、個人の社会的行動とを、調和させるにはどうすればよいのかを考えてきた。そのためには、政治的なもの、倫理的なもの、芸術的なもの、娯楽的なもの、等々を理論化しなければならないと思う」(Hobson [1976], pp. 7-8. 邦訳, 2ページ)。(ただし、私の訳文は、邦訳書に従っていない。邦訳書の文は、解釈をするのに、かなりの困難さを覚えるからである。以下の私の訳文も同様である)。

ホブソンは、1858年7月6日に生まれ、1940年4月1日に逝去した英国の経済学者で、帝国主義の批判者にして著述家である。英国ダービー (Derby) 市で生まれ、1880年から1887年までオックスフォード大学リンカーン・カレッジ (Lincoln College, Oxford) で学んだ。大学を卒業した後に経済学の研究を始めた。ラスキン (John Ruskin, 1819-1900) と米国のヴェブレン (Thorstein Veblen, 1857-1929) にもっとも強い影響を受けた。とくに、ヴェブレンについては、当時の世論は馬鹿にしていたが、ホブソンがもっとも早く高い評価を与えたと言われている。ハーバート・スペンサー (Herbert Spencer, 1820-1903) の社会学の影響をも受けている。

ボア戦争が始まる前に、『マンチェスター・ガーディアン』誌 (*Manchester Guardian*) の通信員として南アフリカに渡り、セシル・ローズ (Cecil John Rhodes, 1853-1902) による財界支配や原住民の悲惨さをつぶさに観察し、その時の見聞録が有名な『帝国主義論』 (*Imperialism*, 1902) である。

ボーア戦争（Bore War）に反対し、第一次世界大戦時には英国の中立を主張した。それまでは長年、自由党（British Liberal Party）に入党していたが、第一次世界大戦後に離党した。その後、独立労働党（Independent Labour Party）と行動を共にした。

1889年にロンドン大学LSE（London School of Economics）講師の口があったが、当時、著名であった実業家、マメリー（A. F. Mummery, 1855-95）との共著『産業の生理学』（Mummery & Hobson [1889]）の内容が正統派経済学からの大きな逸脱であるとして、人事委員会から忌避された。確証はないが、エッジワース（Francis Ysidro Edgeworth）がもっとも強力な反対者であったとされている。LSEでの職を得ることができなかったホブソンは、以降、アカデミズムの世界で職を得ることはできなかった。

それでも、進歩的な週刊誌『ネーション』（*Nation*）への寄稿家として1907年から1923年まで活動し、米国のブルッキングズ研究所（The Brookinngs Institution）で大学院生に講義したり、ニューヨークの『ニュー・リパブリック』誌（*New Republic*）等々の雑誌にも寄稿した。米国におけるホブソンの活躍がフランクリン・ルーズベルト（Franklin Roosevelt, 1882-1945）のニュー・ディール政策に影響を与えたと、ホブソン伝の著者、ブレールスフォード（H. N. Brailsford）は主張した（Brailsford, H. N. [1948]）（Wikipedia, the free encyclopedia, John A. Hobson による；アクセス、2008年6月25日）<sup>1)</sup>。

---

1) ここで、フリー百科事典、『ウィキペディア』に依拠したことの弁明をしておきたい。専門家の多くが、このウェブ・サイトを軽蔑している。無名の素人たちが作る辞書だからである。確かにこの事典には誤謬が多いことは否めない。しかし、専門家のすべてが正しい知識で叙述しているとは私には思われない。数人の専門家の知識よりも何十万人もの素人の知識の方が正確で豊富であると私は信じている。

このウェブ・サイトのフリー百科事典は、「ウィキメディア財団」（The Wikimedia Foundation, 本部は米国フロリダ州タンパ）という非営利団体が、広告を載せず、寄付によって運営している。2001年1月に開始された。「ウィキ」とは、ハワイ語で、「すぐに」という意味である。ネット上で誰でも執筆・編集ができる「みんなで作る」百科事典で、利用は無料である。英語版で約170万項目、日本語版でも約33万もの項目が収録されており、流行語から学術的な項目まで、幅広く解説されている。専門家も含めて、様々な人が最新の情報を書き込むので、米国の『ネイチャー』誌（*Nature*）は、「科学分野の項目の正確性においては、『ブリタニカ百科事典』（*Encyclopedia Britannica*）に匹敵する」とまで評価している。

しかし、最近、寄付金収入が細ってきたので、閉鎖の噂が絶えない（<http://ja.wikipedia.org/wiki/Wikipedia/>；『週刊文春』2007年3月8日号、54ページ）。このフリー百科事典は、かつての、ゲーテンベルク（Johannes Gensfleisch zur Laden zum Gutenberg, 1398?-1468）による『聖書』印刷、蓮如による教典の平仮名訳、に匹敵する革命的な知識の倉庫だと私は最上級の評価をしている。

## 2 J.A. ホブソンの生活の経済学

一連のホブソン研究を発表されている大水善寛氏は、「『産業生理学』における J. A. ホブソンの経済思想」(『第一経済大学論集』第18巻第4号, <http://www.aomoricgu.ac.jp/staff/oomizu/thesis/daiichi27.html>; アクセス, 2008年6月25日)において, 経済学を他の学問分野から独立させて「全く分離した1つの実証科学」と見なす当時の正統派経済学思想に反発して, 「人間の社会的行動」全体の分析を行う「思想の一般体系」を提唱したのが, ホブソンであると指摘された。そのさい, 「生活が富である」というラスキンの「人道主義」の考え方にホブソンは共鳴したのであり, それまでの経済学が, 人間の経済活動のほんの一部しか扱っていないことを告発したという意味で, 経済学界からホブソンが「異端視」されてしまったと氏は言われる。

氏は, ホブソンの姿勢を次のように理解される。

「社会一般の福祉の指導原理をうちたてるにあたっては, 経済・政治・倫理等々の諸々の分野から発生する諸力を十分に考慮しなければならないし, また, 経済社会で不利な立場におかれたり, 自由を奪われている市民等の『弱者』層の運命或いは生活を改善するための政治体制の企画は, 経済学において十分に考慮されなければならないという考え方である」。

そうした整理の上で, 「生物学的有機体」としての人間, 「全体性」を認識する社会科学の必要性, 「集団生活」としての社会, といった3つのキー概念にホブソンがこだわっていたと大水氏は理解される。

こうした, 現代人の問題意識に強く引き寄せた氏のホブソン解釈が正しいのかどうかを判定する能力は私にはない。しかし, セシル・ローズという俗物へのホブソンの激しい嫌悪感, 分配面で日常的に存在している不正義へのホブソンの激しい憤り等を見るにつけ, 同氏のホブソン理解には共感を覚える。ホブソンの著述の中で, 容易に確認できるような明確な言葉で表現されているわけではないが, ホブソンの思想を大水氏のように理解することは無理なことではない。

私には, 人間を扱う経済学で, 学問的進歩があったとは思われない。人間を扱う限り, 古代人よりも現代人の方が人間的な成熟度が高いなどは, とてもではないが, 言い切れないからである。それに, 当たり前のことだと思うが, 学問を積んだ専門家の方が, 学問の訓練を受けていない素人よりも, 生き方において高尚であるなどとは言えない。事態は, 往々にして逆である。人間を扱う学とはそうしたものである。経済学はそうした人間の営為に光を当てるものでなくてはならない。経済学は, 単細胞的科学であってはならないの

である。

ホブソンは、不平等な社会への怒りをぶつけ、それを理由として大学には受け容れてもらえなかった。それだけで、ホブソンを研究する現代的意味は十分にある。ホブソンの過少消費説が、ケインズ（John Maynard Keynes, 1883-1946）の有効需要不足論の先駆者となったなどと、学説的な解釈をすれば、そのこと自体が、ホブソンから輝きを奪うことになる。

ホブソンは、ケインズの先行者としての栄誉よりも、全身で不平等社会を告発したという怒りへの共感を、後世の人間から得たかったであろうと、私は信じる。

ホブソンは言う。

「生産の目的は、消費者に『有用な物や便利な物』を提供することにある。最初は原料を処理し、そこから有用な物、便利な物が作られ、最終的に消費される。生産とはそうした連続性である。有用な物や便利な物の生産を助けることが資本の唯一の用途であるべきである。・・・ところが、過度の貯蓄が、必要とされる以上の資本蓄積を引き起こし、この過剰が一般的過剰生産の形を取る」（Mummery & Hobson [1889], p. iv）。

ホブソンのこの文章が、貯蓄しすぎるから過剰生産は発生する、したがって、人々は、もっと消費すべきであるとの考え方、つまり、不況は過少消費からくるものであると学説史的に理解されてしまえば、ホブソンにとっては屈辱であろう。

ホブソンの信念は、生産とは生活に不可欠の資料を提供するものでなければならない、社会は、単なる金儲けのために、不必要な物を生産してはならない、というものである。にもかかわらず、そうした無駄な物資が生産されるのは、利潤の分配が不平等だからである。利潤をわずかしか分配されなかった人々が、生活に必要な物資を購入できないでいる。そして、多くの利潤の分配を受けた資本家は、より多くの利潤を得るべく金の儲かる物資を生産する。しかし、それらは、多くの場合、生活に必要なものではない奢侈品である。金持ちたちの、より多くの享楽に奉仕する品物の生産が組織されているのに、貧乏人たち向けの生活必需品は生産されていない。貧乏人たちは購買力をもたないからである。つまり、ホブソンのいう過少消費とは、人々一般が消費しないということではなく、貧乏人が必要な物資を購入できないのに、金持ち用の、生活に不可欠でない物資が過剰に生産されている、という現象を指摘したものである。

すべての害悪は、資本家の過剰貯蓄にある。資本家は、なるべく、労働者を雇用しないようにしている。その結果、労働者の消費能力は減退する。その反面、資本家の貯蓄は増加する。そこから不必要な生産が組織されてしまう。

不必要な物の生産が「無限に増加される」、必要な物の消費は「最低限に維持されている」、

「貯蓄には制限がない」。ホブソンは、事態をこのように表現する。

生活に不可欠な物を生産する資本を、ホブソンは、「真実の資本」(Real Capital)と名付けた。そうした有用な資本は、「真実の貯蓄」(Real Saving)によって生み出される。生活に不必要な物を過剰に生産する資本を、彼は、「偽の資本」(Nominal Capital)と命名した。そうした資本を生み出すのが、「偽の貯蓄」(Nominal Saving)である(Mummery & Hobson, [1889], p. 36)。生活に根ざしたものが、「真実」であり、生活から離れて金儲けに走るものが、「偽」なのである。

見られるように、ホブソンは、過少消費＝過剰貯蓄、したがって、消費者はもっと消費しろと言ったのではない。生産と投資の中身を問うたのである。

「富裕階級の剰余所得が、社会に、鬱血と梗塞という疾患をもたらしている。このような経済的疾患を解消するには、労働者の分け前をいまよりも増やすか、進歩的な国家による適切な介入によって、富裕層の所得を使うか、あるいはその両者を併用することによって、富裕階層の所得が他の層に吸収されるようにすることが必要となる。こうした健全な配分が実現すれば、経済組織は、もっと完全な、もっと規則的な、もっと生産的な活動に着手できることになるだろう。健全な経済組織は、他の組織ではできないような、良好な秩序と進歩を生み出すのである」(Hobson, J. A. [1922], 邦訳, 86ページ)。

岸本誠二郎が、ホブソンの過少消費説の正確な側面を指摘してくれている。

「販路説では、生産されるものは当然消費され、供給は需要となると考えられていたが、ホブソンは、生産の動機として消費欲望のほかにそれとは異なる貯蓄欲望があることを指摘した。人間がめいめいの消費欲望だけによって生産しているならば、販路説の仮説のようになろうが、生産が貯蓄欲望によって推進される場合には異なる。貯蓄欲望による生産は、社会においては消費欲望を超えて無限に増進しうるので、これが過剰生産を作り出すと考えた」(岸本誠二郎 [1975], 64ページ)。

人間の真に必要な資料を生産する経済組織を作ろうと試みた経済学者が、大学から拒絶されたことのおぞましさを、私たちはいま一度思い起こしておこう。若い芽を摘んではいけない。これは私自身の自戒でもある。

### 3 ラスキンのによる富の定義

知られているように、ホブソンは、ラスキン(John Ruskin)から多くの影響を受けている。この節では、ホブソンによって、発展させられたラスキンの「富」(wealth)についての理解を見ておきたい。ラスキンは、経済学が目指すべき目標を人間の向上に置いた。彼は、J.

S. ミル (John Stuart Mill, 1806-73) の「豊かであるということは、必要な品物を豊富にもっていることである」という理解を踏襲した。

「『もつ』ということは、絶対的な力ではなく、相対的な力を表している。所有物の量や質が大事であることはもちろんであるが、それよりも大事なことは、財をもち、財を使う人にとって、その財がふさわしいということである」(Ruskin, J. [1903-10], vol. 17, p. 87)。

彼は、そうした財のことを「役に立つ品物」(useful articles) と名付け、それを「効用」(utility) と同義のものとした。つまり、ラスキンは富を2つの側面から定義した。1つは、「役に立つ」(useful) もの、2つは、所有者がその品物を容易に入手でき、それによって、自らの能力を高めることができるものでなければならないこと、というのである。後者のことは彼は「受諾能力」(acceptant capacity) という用語で表現した。

「従って、富は、たくましく生きる人 (the valiant) がもつ、役に立つもの (the valuable) である。そうした富は、国力の源泉でもある。評価がなされるのは、物の価値と、その物をもつ人の活力とを併せたものでなければならない」(Ruskin. [1903-10], vol. 17, pp. 88-89)。

「価値は、物自体の内在的なものだけではなく、所有者の活力にも依存している。そのことによって、富は有効に使用されるのである」(vol.17, p. 166)。

役立つもの、所有者の能力という2つの側面に加えて、ラスキンは、第3の側面として、正しく組織される生産を重視する。

富とは、信頼され、活力溢れる産業によって生産される財のことであり、無慈悲な専制や詐欺まがいの生産者の下で作られた、すぐに廃れる奢侈品等は富ではない (vol. 17, p. 52)。ラスキンは、こうした論点を打ち出すことによって、当時の正統派経済学に挑戦したのである<sup>2)</sup>。

富をこのように定義したラスキンは、価値 (value) にも独特の定義を与える。

「価値 (valor) は、活力 (valere) という面からすれば、・・・(それが人間のことを指す場合) 人生における (in) ・・・健康 (well), つまり、健全さ (strong) を表す。それはたくましさ (valiant) のことでもある。(それが事物のことを指す場合、それは、) 人間の生活にとって (for) の健全さ (strong) をもたらすもの、つまり、役に立つ (valuable) ものである。ここで、『役に立つ』(valuable) ということは、『人生に資する』(avail

---

2) Fain, John Tyree [1943] は、ラスキンが同時代の経済学者に吹きかけた論争を紹介したものである。

towards life) ことである。真に役に立つもの、資するものとは、もてる、すべての力能を動員して (with its whole strength) 人生を高める (leads to life) ものである。人生を高めることなく、そうした力能が損傷される度合いに応じて、それは役立つ度合いを大きくする。人生を損なうものは役に立たないし、害あるものである」(vol. 17, p. 84)。

『価値』(value) は力能を表す。生活を支えることに『資する』(availing) ものである。それはつねに二面性をもつ。価値とは、第一次的には内在的 (intrinsic), 第二次的には実効的 (effectual) な側面をもつ」(vol. 17, p. 153)。

そもそも、可能性として品物に内在しているが、それを顕在化すべく、たくましい人間によって、人生に活かされ、実効あるものに仕立て上げられたものが、価値なのである。

「効用」(utility) の定義も、ラスキンのそれはユニークである。既述のように、「効用」とは「役に立つもの」(usefulness) と同義である。それは、人がそれを使う際に、生活にとって役立つという側面を意味する。

「物が役立つということは、物自体の本性ではなく、物を使う人が、そのように仕立て上げた (in availing hands) 結果である (vol. 17, p. 88)。

役立つもの、それが富である、という抽象的な表現だけでは、ラスキンは、実態経済に即していない歯の浮くような美辞麗句を駆使しただけの人のように受け取られる可能性がある。事実、ラスキンを心から尊敬するホブソンですら、ラスキンに欠けているのは社会学的考察 (social theory) であるとした (Hobson, J. A. [1898], pp. 104f)。ただし、ジョン・タイル・フェイン (John Tyree Fain) は、ホブソンの言い過ぎだとラスキンを擁護している (Fain, J. A. [1952], p. 302)。

ラスキンは、生産者と消費者を別人格のものであるとする正統派経済学への果敢な挑戦を行おうとした。生産過程が消費過程を決定するとの立場から、彼は、労働者が生産現場への指揮権をもつことを提言した。労働者が使い捨てられるような生産現場では、労働者自身が自ら生産する財への接近ができないばかりか、生存そのものを脅かされる。そういう悲惨な環境の下で産出された財は、けっして富 (wealth) ではない。

「どの国民にとってもそうであるが、富について、まず第一に研究されるべきことは、国民がどれだけ多くの財をもっているかではなく、財が有益に使用されているか、財が使用できる人の手元にあるかということである」(vol. 17, p. 161)。

「政治経済学の究極の目的 (the final object of political economy) は、それゆえに、よい消費方法を手に入れ、豊富な物資を得ることである。言い換えれば、あらゆる物を使い、それも優雅に (nobly) 使用できるようにされるものが富である」(vol. 17, p. 102)。

「経済学者たちは、よく、完璧な消費などはないと言う。そんなことはない。完璧な消

費こそが、生産の目的であり、王冠であり、完成なのである。賢く（wise）消費することは、賢く（wise）生産することよりもはるかに難しいことなのである」（vol. 17, p. 98）。

再々こだわるが、「効用」（utility）をラスキンはかなり広い意味で理解している。よい消費を生み出す生産が、効用をもつという言葉の使い方を彼はしている。

「よい仕事は役に立つ（useful）。・・・これまで、私たちは、自分の仕事が、自分自身に対して、あるいは国家に対して、どのようなものになっているのかを自問してこなかった。仕事が優雅に遂行されたかということにも気にかけてこなかった。他の人たちの仕事が優雅であるかということをも心に留めなかった。少なくとも、忌まわしい（deadly）ものではない、役立つような仕事にすることに、私たちは、留意してこなかった」（vol. 17, p. 426）。

効用は、生産にも、消費にも、労働自体にも存在する。人生の中身を豊かにすること、それが効用である。人生とは、仕事に生き甲斐を見出すべきものである。仕事が地獄になれば、休日に浴びるほどワインを飲んで酩酊してしまうことになる。そうした狂気の世界は、効用の正反対の極に立つものである」（vol. 17, pp. 505, 542f）。

ラスキンは、この効用の反対のものを「コスト」と理解する。人生の内容を貧しくさせてしまう負の労働（labor）がコストである（vol. 17, p. 97）。苦痛とを感じる労働がコストである。つまり、物を生産するのに、多くの仕事（work）を必要としても、その仕事自体が楽しければ、費やした時間はコストではない。楽しくなく、苦痛に感じる労働がコストなのである（vol. 17, p. 183f）<sup>3)</sup>。

---

3) ホブソンは、ラスキンを全面的に受け容れ、ラスキンを忠実に祖述した人であると一般には理解されている。フランク・ダニエル・カーティン（Frank Daniel Curtin）の論文はそうした一般的理解を代表するものである（Curtin [1940]）。そうした理解に対して、少し違うと異議を申し立てたのが、ジョン・タイル・フェイン（John Tyree Fain）であった（Fain [1952]）。確かに、ホブソンの価値理解は、ラスキンとの食い違いを見せている。「物の価値（the value of a thing）は、・・・考え方に影響されるものではない。・・・人がその物に対して何を感じようとも、・・・それによって物自体の価値が増減することはない。・・・酔っぱらいがジンという酒にどれほどの高い価値を与えても、ジンが本来もつ内在的価値は変わらない」（Hobson [1898], p. 115）。

ただし、私は、フェインのように、ホブソンのラスキン理解の誤りだとは見ない。ラスキンには社会学的力学の考察が、ホブソンが言うように、いささか弱かったと私は受け取らざるを得ない。

#### 4 「経済」とは「抑制」のことであり、「ポエム」であるーラスキンの感覚

あまりにも常識的なことであるが、それでも、重要なことなので、あえて強調しておきたい。ジョン・ラスキンは、政治学・経済学と芸術とを融合する理論の構築を目指した人であった。それは、彼が、初期の著作から一貫して希求してきたテーマであった。

彼が、このテーマを最初に意識したのは、彼の述懐によれば、じつに満9歳の少年時代であった。彼は、後の『空中の女王』(*The Queen of the Air*) (vol. 19, pp. 396-97) にこの9歳の時に書いた詩を紹介している。

木々が揺れている (side)  
波のように  
岩肌に取り付いて

人々が滑り降りる (glide)  
陽炎のように  
木々の間を

滝の音がする  
遠くから (far)

見てみよう  
近づいて (near)

水車が回っている (round)  
ゆっくりと

麦が挽かれている  
それを生んだ大地よ (ground)  
(未来の政治経済学!)<sup>4)</sup>

---

4) きちんと韻を踏む英語の詩を日本語に訳すことは至難の業である。韻を踏むのが困難な日本の詩は、文字と字間、さらには、母音のつながり方に、美しさを表現するものだからである。拙い訳詞だが、たったこれだけの長さの翻訳に、とてつもなく膨大な時間を費やしたということで、諸氏の寛恕を乞いたい。

9歳の少年の若い感性が描いた自然の恵みの中での人間の生活の営み。これが彼の終生のテーマとなった。

彼の処女作は、『建築という詩』（*The Poetry of Architecture*, 1837-38）である。ここで彼は、建築で施される装飾に関して、面白いことを言った。

経済上のコストだけを考えれば、建築物に装飾などはない方がいいに違いない。しかし、装飾を施すことによって、人間の満足度が増す。装飾のために費やされた金銭の額以上に、装飾が人に満足を与えるからである。装飾を施すのなら、立派なものにしなければならない。

「ファージング（4分の1ペニー貨）を節約して、（駄目な装飾にしてしまえば）1シリングに匹敵する打撃を受ける。これは悪しき行為である」（vol. 1, pp. 184-85）。

これが、彼の言う「芸術経済論」である。

人は、なぜ、建築物に、わざわざ費用をかけて装飾を施すのであろうか。人は、みずからの制作物に自然を取り入れたいという性質をもっているからである。ラスキンはそのように装飾の価値を理解する。

この処女作にラスキンは、本名ではなく、ペンネームを使った。*kata phusin* という名前である。それは「自然に従う人」という意味である。

ここで言う「経済」（economy）とは、自然が見せる「抑制」のことである。自然は、必要最小限の費用で最大の効果を挙げている。つまり、自然は華美さを避ける抑制を本性にしている。装飾は、自然のそうした抑制を模倣しなければならない。その意味において、「経済」とは「抑制」のことである。

過度に金をかけてゴテゴテとした装飾は野卑である。自然が醸し出す調和こそが必要である。「自然は、色彩をみごとに節約している」というのが、『絵画の基礎』（*The Elements of Drawing*, 1857）の主張点であった（vol. 15, p. 153）。これは、『自然の色彩節約』（*Nature's Economy of Colours*）でも再論されている（vol. 15, p. 217）。

1857年の『芸術経済論』に付け加えた論文に、「文学の経済」（"Economy of Literature"）というのがある。それは、「言葉の抑制」という意味である。文学では多様なレトリックを駆使するなというのが、その論文の内容である。ラスキンは、スペンサー（Harvard Spencer, 1820-1903）の『型の哲学』（*The Philosophy of Style*, 1858）を援用して、「最少の使用言語で最大の表現を実現させることが著者のもっとも崇高な目標であると認識すべきである」と言った（vol. 16, Appendix 6）。

『建築の七灯』（*The Seven Lamps of Architecture*, 1849;邦訳、岩波文庫、1997年）、『ヴェネツィアの石』（*The Stones of Venice*, 1853）の1つの章「ゴシックの本質」（The Nature

of the Gothic), 『芸術経済論』 (*The Political Economy of Art*, 1857; 邦訳, 巖松堂, 1998年), 『機能の散らばり』 (*Munera Pulveris*, 1862-63), 『胡麻と百合』 (*Sesame and Lilies*, 1865), 等々の著作でも, 「抑制」と品格の問題が, 様々な旋律の下に奏でられ続けた。

ラスキンは, 仕事を遂行する環境の良否が, 作品の質を決定するという意味で, 経済と芸術は同じ論理をもつと考えていた。

なぜ, ある時代に, とてつもなく素晴らしい作品が輩出するのに, 他の時代には凡庸な作品しか出ていないのか。その理由を, ラスキンは, 『ヴェネツィアの石』で論じた。芸術家や職人たちが, 最高の仕事場と仕事環境に恵まれた場所と時代に最高の作品が出てくるのであり, 他の時代は, 仕事場所の環境の悪さが作品を駄目しているというのである<sup>5)</sup>。

しかし, ラスキンのこのテーマは, マルク・シェル (Marc Shell) によれば, 彼を崇拜する人たちによってですら, 十全に理解されてきたわけではないという (Shell, Marc [1977], p. 65)。例えば, マルセル・ブルースト。彼も, ラスキンを高く評価する人であったが, ラスキンの, 芸術と経済との同一視の姿勢には否定的であった (Proust, M. [1971], p. 106)。

## おわりに

おそらく, 現代になればなるほど, ラスキンのこのような倫理的な矜持は, はなから嘲り笑われるだけであろう。非凡な才能であらゆるジャンルの書物を解説される松岡正剛ですら, そのブログで, 次のように嘆息されている。

「トルストイやブルーストやガンジーが学んだラスキンを, いったいどのように今日の社会にふり向ければいいのか。・・・ラスキンが同時代に背を向けてしまったように, ラスキンを現在の社会に向けるということ, 非ラスキ的なことだと, ・・・そういうことだったのだろうか」(「松岡正剛の千夜千冊『近代画家論』ジョン・ラスキン」, <http://www.isis.ne.jp/mnn/senya/senya1045.html>; アクセス, 2008年6月25日)。

---

5) ただし, 言葉尻を捕らえるようであるが, ラスキンにして, 不用意な発言をしている箇所がある。「画家であれ, 詩人であれ, あらゆる創造的な仕事をす人は, あらゆるものを人生を向上させるため紡ぐ。その点では, 時計職人は鋼を使い, 靴職人は皮革を加工するだけである」(『近代画家』(*Modern Painter*), (Ruskin. [1903-10], vol. 7, p. 215)。ラスキン自身の基本姿勢から逸脱するこのような職人蔑視の言葉が, なぜ出されたのかは不明である。後には, ラスキンはそうした言辞を吐かなくなったのであるが。

いや、待って欲しい。昔、死の前夜にあった特攻隊員の多くが、娯楽小説よりも、宗教的な『歎異抄』を読んだという事実は、限りなく重い。明日死にに行くことを覚悟した特攻隊員の多くは、最後の瞬間に、酒で怖さから免れようとはしなかった。悄然と死を見つめた。それが、人間の「自然」(nature)であると私は信じたい。

投下すべき原子爆弾を積んだ戦闘機のパイロットを迎撃することは間違っている。彼の良心に訴えるべく、白いハンカチを振って、攻撃を辞めろというのが正しい選択であると、彼を敬う外国人記者に語ったガンジーの心のすごさに私はやはり魂の震えを感じる。主よ、私を殺そうとする彼らをお許し下さい、彼らは、なにを成すべきかを知らないだけなのだからと、主に祈ったイエスの言葉は、宗派を超えた永遠の真理である。そうした真理の前に、私たちは素直にひざまずこうではないか。

ラスキンの矜持を踏襲したのは、紛れもなくホブソンであった。ホブソンは、ラスキンの倫理に社会哲学を適用した。そこでは、コミュニティとヒューマンイズムが強調されていたのである。現実社会の不平等、不公正な配分の原因、そして、それらを克服する社会正義、等々のホブソンの議論は、いまなお輝きを失ってははいない。大水善寛氏は言う。

「経済政策の効果という点からすれば、ケインズのそれとホブソンのそれは同様と考えられるが、社会哲学における両者の相違を考慮するならば、経済政策の出発点および結果は自ずから異なったものとなる。換言すれば、ホブソンは経済政策を、・・・平等、公正な配分を保証する社会へと変貌するための手段としている」(同氏、「産業生理学」におけるJ. A. ホブソンの経済思想, <http://www.aomoricgu.ac.jp/staff/oomizu/thesis/daiichi27.html>; アクセス, 2008年6月25日; 『第一経済大学論集』, 第18巻・第4号)。

至言である。繰り返し強調するが、人間学とは理論的に直線的に進歩をするものではない。それは、広がりである。それは、多様な深みを理解するようにすることである。ラスキンの問いがホブソンに受け継がれ、そして、多くの人の心に火を点す。人間的社会科学とはそういうものである。ちなみに、最近の私は、J. S. ミルの人間学に注目するようになっている。

## 参考文献

- Brailsford, H. N. [1948], *The Life-work of J. A. Hobson*, Oxford University Press.  
Curtin, Frank Daniel [1940], "Ruskin's Aesthetics in Subsequent Social Reform," in Davis, Bald and DeVane, eds, *Nineteenth-Century Studies*.  
Fain, John Tyree [1943], "Ruskin and the Orthodox Political Economists," *Southern Economic Journal*, X, July.

- Fain, John Tyree [1952], "Ruskin and Hobson," *PMLA* (Publications of the Modern Language Association of America, Vol. LXVII, No. 4, June.
- Hobson, J. A. [1898], *John Ruskin, Social Reformer*, Nisbet.
- Hobson, J. A. [1922], *The Economics of Unemployment*, George Allen & Unwin. 邦訳, ホブソン, 内垣謙三訳『失業経済学』同人社, 1930年。
- Hobson, J. A. [1976], *Confessions of an Economic Heretic: The Autobiography of J. A. Hobson*, Shoe String Pr. Inc. 邦訳, J. A. ホブスン, 高橋哲雄訳『異端の経済学者の告白－ホブスン自伝』新評論, 1983年。初版は, 1938年, 版元 Allen & Unwin。
- Mummery, A. F. & J. A. Hobson [1889], *The Physiology of Industry: Being an Exposure of Certain Fallacies in Existing Theories of Economics*, J. Murray.
- Proust, Marcel [1971], *Contre Sainte-Beuve, précédé de Pastiches et mélanges et suivi de Essais et article*, ed. Clarac, P.
- Ruskin, John [1903-10], *The Works of John Ruskin*, 39 vols, ed., by Cook, E. T. & A. Wedderburn, George Allen & Unwin.
- The Poetry of Architecture*, 1837-38, in vol. 1.
- The Elements of Drawing*, 1857, in vol. 10.
- "Economy of Literature," in vol. 16.
- Unto This Last*, 1862, in vol. 17.
- The Queen of the Air*, in vol. 19.
- 岸本誠二郎 [1975], 『現代経済学の史的展開』 ミネルヴァ書房。